

ヴェーバーの宗教社会学（1）

勝 又 正 直

1. 序

本稿は、ドイツの社会学者、マックス・ヴェーバー（1864－1920）の書いた、『宗教社会学論集』全3巻、を読み解きながら、世界の諸宗教とそれを生み出した社会についての概観を得る、と同時に、西洋近代社会というものがいかなる原理を持つ社会なのか、を解明していこうとするものである。

『宗教社会学論集』の構成

ヴェーバーの『宗教社会学論集』は、以下のような構成をもつ論文集である。

序言

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神
プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神
世界宗教の経済倫理

序論

儒教と道教

中間考察

ヒンドゥー教と仏教

古代ユダヤ教

（付録：パリサイびと）

この論文集は、キリスト教、儒教、道教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、ユダヤ教の諸宗教を考察するのみならず、中国、インド、東南アジア、中央アジア、極東、中近東、西洋の、社会と歴史を、その自然条件・経済・政治・文化などのさまざまな側面から考察し、かつそれを統一的な社会像として把握しようとするものであった。まさに社会をまるごと把握しようとする野心にみちた論文集であり、その把握の目指すものは、我々を今覆い支配している近代社会というものが何であるのか、という社会学固有の問いに答えようとする作品である。

ヴェーバー自身が後世に残そうとして、まとめた（まとめた）論文集はこの論文集だけである。その作品の影響力、その透徹した視野、完成度において、マックス・

ス・ヴェーバーの最高傑作というだけではなく、社会学の歴史にそびえる巨大な壁のような古典的作品群であると言える。

我々は、この論文集がどのように書かれ作られていったのか、作品形成をたどることで、この論文集を貫く、ヴェーバーの問題意識を明らかにしつつ、この論文を読み解いていくことにする。その過程で、彼の教科書的な遺稿である『経済と社会』、とりわけ、その中の『宗教社会学』や、そのほかの論文を、あくまでもこの論文集のとの関わりにおいてではあるが、扱いたいと思う。

『宗教社会学論集』の成り立ち

この『宗教社会学論集』は次の順で書かれた。

まず、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が1905年にヴェーバーが編集する『社会科学並びに社会政策雑誌』に発表された。

つぎに11年のブランクのあとに、「世界宗教の経済倫理」の「序論」・「儒教」・「中間考察」が1916年に、同じく『社会科学並びに社会政策雑誌』に発表された。

ヴェーバーは以上の論文を改訂して『宗教社会学論集第1巻』として1920年に発刊した。その際、この『宗教社会学論集』全体の「序言」が新たに書かれ、また、「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」という論文が追加された。また、その他の論文も改訂されたが、とくに「儒教」は大幅に増補改訂されて題名も「儒教と道教」となった。

「ヒンドゥー教と仏教」は1916－17年に『社会科学並びに社会政策雑誌』に発表され、「古代ユダヤ教」は1917－19年に『社会科学並びに社会政策雑誌』に発表された。

ヴェーバーが1920年に死んだために、この2つの論文は改訂されることなく、そのまま『宗教社会学論集』の第2巻と第3巻となり1921年に発刊された。なお、第3巻には、遺稿であった「パリサイびと」が付録として追加された。

2. 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（1）

まずヴェーバーの『宗教社会学論集』の出発点となった「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文をみることにする。

古典とは

この著作は、社会科学の古典とみなされている。

「古典」と聞くと、「とっつきにくい」、「わかりにく」、さらには「つまらない」ではないか、というイメージ（先入観）を持たれがちである。そのため、ついつい直接それを読むかわりに解説書や教科書の記述に頼りがちである。

じつはそれが間違いの元である。

こと社会学に限って言いますと、解説書の解説はだいたい間違っている（橋爪1995）。百歩譲って、間違っていないとしても、わかりづらい。元の本が説明するために何百頁も使ったことを、解説ではがそれより短い頁で説明しようとするのであるから、わかりにくくなっても当然である。たとえ万が一、わかりやすかったとしても、多くはつまらないである。漁港でとれた新鮮な魚も何人もの仲介業者を通すと鮮度がおちてしまう。おなじように、元の本が持っていた新鮮な驚きは、解説書や教科書からは抜け落ちてしまっていることがほとんどである。古典は、解説書など読まないで、直接読んだほうがおもしろい。これは覚えておくいいことである（なかなか実行しづらいことではあるが）。

「新鮮な驚き」、と言った。そう、古典というのは、難しい、立派なことが書いてあるから、「古典」とみなされているのではなくて、おもしろい（知的好奇心をかきたてる）から、「古典」なのである。

というより、実は、多くの古典は、ちょっと変である。実際に読んでみると、「こんなことが書いてあるのか？」とびっくりすることが多い。

カントの『純粋理性批判』

たとえば、カントの『純粋理性批判』という西洋哲学の古典がある。カントの名前は聞いたこともあると思う。そのカントの名著という、やたら難しく、退屈な本、本のような気がする。たしかに途中まで難解で面倒な本である。だが真ん中あたりの「純粋理性の二律背反」になると、印象はがらりと変わる。そこでは、カントは、本の左頁と右頁を対照させ、「純粋な理性」に一人二役をさせ、正反対なことを主張させる。左の頁で「純粋理性」氏は、「世界には最初の原因（第一原因）となるものがある」と主張する。ところが右の頁では、おなじ

「純粋理性」氏が「世界には第一原因なんてない」と主張する。

「第一原因」とは、トマス・アクィナスの『神学大全』という中世神学の基本書によれば、「神」のことである。つまり、「純粋理性」氏は、見開きの左頁では「神は存在する」と主張していたかと思うと、右頁で「神なんていない」と主張しているのである。いや主張だけでなく、「理性」氏は、その正反対な主張を、背理法をつかって、「もし神がいなくすると・・・」、「もし神がいるとすると・・・」として、その結果矛盾が生まれるから、「神はいる」、「神はいない」と結論していくのである。一人二役、神様を支持する役と神様を否定する役、それを同じ「純粋理性」が演じているのである。これはまるで正気の沙汰ではない。人間が純粋にその思考だけを展開していくと、そこにはこうした狂気が待っているというのがカントが示そうとすることである。

カント、それも『純粋理性批判』の著者なんていうと、なんだか近代理性の立場に立つ落ち着き払った地味な古老、というようなイメージがある。だが本当はこんなふざけた書き方をする洒落気のある、と同時に、人間がもつ狂気の淵をのぞき込んだ人だったのである。

見開きページをつかっての一人二役の、ちょうど、法廷における、検察側と弁護側の陳述のような、しかもそこでは、検察官と弁護士は実は同じ人物の一人二役を演じている、というわけである。そして一人二役の対決から導きだされるのは、「神はいるとも言えるし、いないとも言える」、という、キリスト教が支配していた当時のヨーロッパ世界にとって、とてつもなく危険な結論だったのである。

ドイツの詩人、ハイネはフランス人にむけたドイツ哲学の紹介書『ドイツ古典哲学の本質』の中で、フランス革命でロベスピエールはルイ16世の首をはねた、カントはなんと神に対しておなじことをした、と書いている。カントの同時代の人たちにとって、カントのしたことは、まさに「神殺し」にほかならなかったのである。

ドフトエフスキー vs. カント

この「純粋理性の二律背反」を深刻に受け止め、その解決を小説世界において果そうと格闘したのがドストエフスキーであった（ゴロゾフケル1988）。彼の『カラマゾフの兄弟』という小説で、理性の人である次男イワンは、この、神は存在する、神は存在しない、という二律背反の狂気と絶望の淵にある。彼は無意識に、異母兄弟のスメルジャコフをそそのかし父殺しをさせ、同時に三男アリレーシャにこの淵からの救済を求める。

ふつう、神と対立するのは悪魔である。悪魔はあくまで神があつての悪魔であつて、神の存在を否定したりは

しない。というより、完全なる神がいるにもかかわらず不完全なこの世界を説明するために悪魔は必要とされる。つまり悪魔は神の補完物なのである。

しかし『カラマーゾフの兄弟』に登場する悪魔は、「神がいるかどうか、僕にもわからないんだよ」とうそぶくような悪魔である。つまりこの悪魔は神の敵対者ではなくて、信仰に対する敵対者、つまりカントの二律背反の、神が存在する、神が存在しない、という理性の二律背反（狂気と絶望）を体現した存在なのである。

「神がいなければあらゆることが許される」、ドストエフスキーはしばしばそう書く。「あらゆることが許される」とは、倫理を支える神がないことで、あらゆる悪行（犯罪）が許されてしまう、いうことである。「あらゆることが許される」という時の「自由」とは、「悪の自由」なのである。これがカント以来の「自由」のとらえかたである。我々がふつう考える「自由」とはずいぶんちがう「自由」のとらえ方である。しかし神が造った楽園（エデンの園）で、うまれてはじめて神の命令に反して（自由な意志をもって）、知恵の木の実を食べ、その結果、楽園を追い出された人間にとって、つねに「自由」は、規範・規則からの逸脱（罪・犯罪）と裏腹なのである。

では人間はなぜ犯罪を犯さないのだろうか。それは人間に、「自分だけ特別扱いするルールでなくて、だれにだか適応できるルールで行動しろ」、ということを肝に命じているからである。たとえば、俺だけは人殺ししてもいいと考えると、相手も同じように考えるから、殺されても文句は言えなくなってしまう、だから「人は殺してもいい」というのはまちがっている、人は殺してはいけない、というわけである。

この原理をカントは定言命法と呼び、つぎのように定式化した。「なんじの意志の格率がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」。

人間のあらゆる道徳原理はここを出発点にして合理的に構成・説明することができるとカントは考えた。理性的に考えることが出来る人間は道徳的に正しく行動できるというわけである。

この理性的に考えさせるという発想にもとづいて、近代の刑法（犯罪を扱う法律）では、あらかじめ、「この罪を犯すとこの罰がある」ということを人々に教えておけば、人は「そうか、犯罪は割に合わないな」と考えて、犯罪を犯さなくなるだろうと考えた。このあらかじめ罪と罰を決めて教えておくという考え方を「罪刑法定主義」である。

ドストエフスキーは、政治集団に参加したため、銃殺刑を言い渡され、銃殺の直前に皇帝の恩赦でシベリアに流刑になり、そこで政治犯ばかりか多くの犯罪者を見、

かつ交わるという経験をした。この流刑地の体験以降、ドストエフスキーの作品の中心テーマは、悪の問題へと変わる。そのドストエフスキーにとって、この理詰めに計算すれば犯罪をしなくなるだろう、という発想はがまんならないものであった。多くの犯罪者を見た彼にとって、犯罪とは計算づくのものなどではなく、とどめがたい人間のどす黒い根元悪の噴出であり、そういう形でしかみずからの自由を表現することしかできない人間の最後の自己表現であった。

罪刑法定主義の古典、ベッカリーアの『犯罪と刑罰』とわざと同じような題名をつけた小説『罪と罰』では、彼は計算づくで金貸しの老婆を殺そうとする大学生を主人公にすえる。捕まったら割が合わない犯罪だが、ぜったい捕まらないなら割が合うではないか、金貸しの因業婆が死んで、若く有為な自分が勉学を続けることができるなら、それは社会的にも好ましいことだ、こうした理性的な計算に基づいて殺人を犯した大学生は、しかしそのとき犯行の計算違いから、金貸し婆の、信心深い、妹まで、殺してしまう。彼の犯罪計算は狂ってしまった。このあと、計算づくではない、罪にたいする許しが、天使のような心をもつ娼婦の導きによって、主人公にもたらされるのである。

カント倫理学は、理性の狂気を超えるために（神が命じ与えたであろう）原理からの理詰めの計算によって人間に道徳的にふるまわせようとする。この倫理学との対決こそ、ドストエフスキーの小説でめざしたものにほかなりません。

と同時に、ドフトエフスキーは政治的党派がその独善性のあまり残虐な行動に走る姿を描く。神が存在しないことで倫理が破棄され、党派の「正義」だけが突出するとき、目を背けたくくなるような残虐な党派内部の粛正や党派による横暴がおこなわれる。『悪霊』という小説が描いたのはまさにそうした世界である。その射程は、連合赤軍事件、オウム真理教事件、など、現代まで届いている。

ところでこの『悪霊』という小説ではくりかえし「ジュネーブ思想」という言葉が出てく。「ジュネーブ思想」とは、スイスのジュネーブ出身の思想家ルソーの『社会契約論』のことをさしている。

（ちなみに、この『社会契約論』では、ロシア人は未発達な精神しか持っていない、とされている。ドフトエフスキーの『未成年』という小説の題名はこのルソーの批判からそのまま発案された題名だと思われる。つまり、「未成年」なのは主人公だけではなくて、ロシアの人々全体を指していて、主人公はそうしたロシア精神を代表しているのである）。

ルソーの『社会契約論』

ルソーの『社会契約論』というと、我々は「倫理・社会」などで、民主主義の古典、と習ってきた。私もそう思いこんでいたのであるが、大学卒業してから、はじめて読んでみて、びっくりした。この本では、人民の「一般意志」を体现する立法者は独裁してもかまわない、とされている。つまり、人民の党による独裁が正当なものとされているのだ。これは、（崩壊した）ソ連や中国共産党や北朝鮮の独裁を正当なものとする論理とそのまっつながっている。ルソーの『社会契約論』というのは内部肅正と民衆の大量処刑を、「正しいこと」としておこなう「党の論理」を提示した本なのである。

私見によれば、ドフトエフスキーはこの『社会契約論』の革命党による独裁の論理にあらがいつつも、結局、乗り越えることができなかったように思える。

ところで、ルソーはどうしてこのような、人民を代表するがゆえに独裁できる党、という考えをもつようになったのか。

理由はさまざまだろうが、一つは彼の出身地にあるように思われる。彼の出身地、ジュネーブは、宗教改革者カルヴァンが独裁を敷いていた町だった。（ルソーは、立法者の独裁について述べているときに、注で、カルヴァンのジュネーブでの政治に言及している）。

カルヴァンはジュネーブに人々に請われて指導・支配者となりた。しかしひとたび実権をにぎると厳しい規則を人々に強いて、違反者を処刑したりして、一種の恐怖政治をおこなったのである。ルソーはそうした、神の名のもとによる正義による、独裁政治の歴史をもつ町の出身者だったのである。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読む

おそらく読者の中には、ヴェーバーについて解説書や教科書の記述を読んだ人もあるだろう。その結果、諸君の心のなかにはいくつかの紋切り型の先入観、とりわけヴェーバーは西洋の合理化を問題にした社会学者である、というようなイメージがすでに巣くっているかもしれない。そうした固定的なイメージからいったん自由になるために、この著作を解説していく前に、この『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかのある箇所をまず引用したいと思う。

資本主義人の自問自答

ヴェーバーはこの著作のなかで、「資本主義精神」にみたまされた人々につぎのような（架空の）問いかけをしている。（正確にいうなら自問自答させている）。

「休みなく奔走（ほんそう）することの『意味』を彼

ら（「資本主義精神」にみたまされた人々）に問いかけて、そうした奔走のために片時も自分の財産を享受しようとしない態度は、純粋に現世的な生活目標から見ればまったくの無意味ではないかと問うとき、彼らは、もし答えるとするれば、『子や孫への配慮』だと言うこともあるだろう。しかし、より多くは、——『子や孫への配慮』という動機は、明らかに彼らだけのものでなく、『伝統主義的』な人々にも同様にあるのだから——より正確に、自分にとっては不断の労働を伴う事業が『生活に不可欠なもの』となってしまうからなのだ、と端的に答えるだろう。これこそ彼らの動機を説明する唯一の的確な解答であるとともに、事業のために人間が存在し、その逆でない、というその生活態度が、[個人の幸福の立場からみると] まったく非合理的だということを明白に物語っている。」（Weber1982:79-80）。

この引用を問答形式に書き直してみよう。

「なぜ楽しむことを知らずにそんなに休みなく働いているのですか？」

「子どもたちに財産を残すためですよ。」

「だがそれは昔の人たちだけが考えたことです。でも彼らはずいぶんのんびりと生活を楽しんで生きていましたよ。決してあなたのようにあくせくと働いてはいませんでした。」

「ええ、なるほどそうです。」

「じゃ、なぜそんなにあくせくと働くのですか。」

「まあ、働かずにはいられない、働いて事業を続けることが生活の不可欠なものになっているというのでしょうかね。」

「それじゃ、あなたという人間のために事業があるのではなく、事業のためにあなたは存在する、というわけですね。」

「まあ、そういうことになりますかね。」

ずいぶん、意地悪な問いつめ方である。人が慣れ親しんですっかり同化していることを、ヴェーバーはことさら、あばきたるように問いつめる。そうすることで我々が、同化し慣れて「あたりまえ」に思っていることが、じつは倒錯した非合理的なものにすぎないことが見えてくる。

異化

こうした技法をふつう「異化」と言う。「異化」（Verfremdung, differentiation）とは、「ロシア・フォルマリズムの芸術説で、日常見慣れた表現形式にある「よそよそしさ」を与えることによって異様なものに見せ、内容を一層よく感得させようとするもの」（『広辞苑』）

である。

演劇の世界で、これを中心的な手法としたのが、ブレヒト（Brecht 1898—1956）である。彼は「異化」について、「『三文オペラ』のための註」のなかでこう述べている。

「『三文オペラ』は、その表現する内容ばかりかその表現方法の点だが、市民的な物の考え方と密接に結びついている。それは劇場の観客がこの人生について見たいとのぞんでいるものの見方についての一種の講演である。だが同時に観客は、自分の見たくないものをもいくらか見せられる。つまり、自分の希望が実現されるのを見るだけではなく、それが批判されるのを見る。（自分を主体としてだけでなく、客体としても見るのだ。）したがって、原則的には、演劇にある新しい機能を与えるようになる。」（Brecht 2006:165）

さらにブレヒトはその演劇論でこう述べている。

「もはや観客は、自分の世界から芸術の世界へと誘い込まれるのではなく、むしろ反対に目さめた感覚をもって自分の現実的な世界に連れていかねばならない。・・・その原理は感情同化のかわり異化を導き入れることである。

異化とはなにか？

ある出来事ないし性格を異化するというのは、簡単にいって、まずその出来事ないしは性格から当然なもの、既知のもの、明白なものを取り去って、それに対する驚きや好奇心をつくりだすことである。・・・異化するというのは、だから、歴史化することであり、つまり諸々の出来事や人物を、歴史的なものとして、移り変わるものとして表現することである。・・・劇場はもはや観客を酔っぱらわせたり、さまざまな錯覚を授けたり、この世界を忘れさせたり、自分の運命と妥協させたりしようとしな。これからは劇場はこの世界を、観客がそれに手を加えることができるような形で、観客に提供するのだ。」（Brecht 1962:123—4）

異化する精神

すぐれた学者とはおうおうにして、驚くことの達人である。ヴェーバーはここで我々が慣れきたことに、驚きかつあやしみ、そしてその懐疑へと我々を誘おうとしているのである。

このときヴェーバーは、いわゆる「合理化の社会学者」なのだろうか。むしろ現代社会の人間の生き方の非合理性と倒錯性をあばきたてる「異化する精神」として我々の前に登場しているというべきではないだろうか。

異邦人による異化

「ドワーズ」というロック・バンドの1967年の『まぼろしの世界』（Strange Days）というアルバムのなかに「まぼろしの世界」（People Are Strange）（作詞ジム・モリソン Jim Morrison）という曲がある。その一節。

「きみが見知らぬひとであるとき、ひとびとは見慣れない奇妙なものになる」（People are strange when you're stranger.）

ひとびとのまじめに働くそうしたあり方が「奇妙なもの」に見えるのは、それをみている彼がじつはそれまでの日常から外れて、異邦人のような存在になっているからである。逆にいえば、そうした異邦人の存在になったとき、はじめて日常世界のもつ倒錯性を見せてくるのである。

ヴェーバーの生涯（異邦人への転落）

ヴェーバーの場合、こうした「異化」を可能にしたものはなんだったのでしょうか。それは彼自身の失墜の経験である。

ヴェーバーの生涯はその前半まではまさに順風満帆というしかないものであった。

ヴェーバーは1864年4月21日にエルフルトというワイマールの近くの町で生まれた。父は富裕な亜麻（マ）布（リネン）商人の家系を引く国民自由党代議士、母は敬虔なピューリタンである。長じてハイデルベルク、ベルリン、ゲッティンゲンの各大学で法律、経済、哲学、歴史を学んだ。卒業後、一時司法官試補として裁判所に勤務したのち、学究生活に入った。92年ベルリン大学でローマ法、商法を講じ、1994年に30歳の若さでフライブルク大学の国民経済学教授となり、1897年にはハイデルベルク大学の正教授となっている。

今日の日本だが法学部などは25歳で助教授、35歳ぐらいで教授になったりする。であるからこの経歴は異例とまでは言えないでしょう。（ニーチェは22歳でバーゼル大学古典文学の正教授になっている。異例というならそういうのを指すべきでしょう）。しかしやはりきわめて順調な、まさに「飛ぶ鳥を落とす勢い」の出世ぶりだったことは間違いありません。同時代の社会学者ジンメル（1858—1918）がずっとベルリン大学の私講師にとどめおかれ、ストラスブール教授のなったのはその晩年（1914）だったこと。さらに当時からすでに社会学の古典的著作とみなされていた『ゲマンンシャフトとゲゼルシャフト』（1887）を書いたテンニース（1855—1936）がキール大学に教授になったのが1913年だったこと。ど

ちらも50歳をすぎてようやく教授になったことを考えると、ヴェーバーの経歴がいかに恵まれていたかわかる。

しかし1976年に母の財産処理について父を厳しく追求し、その直後に父親が旅行中に死んでしまってから、彼の運命は急に暗転する。それ以後彼は神経疾患に悩まされるようになり、やがて研究も教育もできなくなりました。1903年ついにハイデルベルク大学を辞めて形ばかりの「名誉教授」となり、遺産と年金によって暮らすこととなります。活動はもっぱら友人と自分が編集している『社会科学・社会政策アルヒーフ』に論文を書くことと『フランクフルト新聞』（ドイツの主要新聞『フランクフルト・アルゲマイネ』の前身）に論説を書くことなどに費やされた。我々が知っている彼の業績の主要なものはほとんどこの時期に書かれたものである。

教職にもどるのは、第一次世界大戦がおわった1918年のヴィーン大学からで、よく1909年ミュンヘン大学に就任する。しかし1920年6月スペイン風から肺炎を併発。14日に56歳で死去している。

ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1905）を書いたのは、彼が社会的な日の当たる場所から完全に身を引いた後である。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、コースアウトしてしまった人間が、それまでコースのなかで必死に働いてきた自分を振り返り、あれはいったい何だったのだろうかと自問自答する、そうした作品になっているのである。であるからさきほど引用した自問自答はじつはヴェーバー自身の自問自答だったのである。

当たり前を当たり前でなくする（異化する）社会学

私見によれば、社会学とは、近代という時代を、そのなかに投げ込まれた個人の側から疑問を提示しつつとらえ返していく学問である。そのためにはこの社会で「当たり前」とされていることを、ある種の違和感をもって見つめ直すことが必要である。つまり日常のあたりまえとされていることを異邦人のまなざしで異化するという性格を社会学は必然的にもたざるを得ないのではないかと私は考えている。

じつはヴェーバーの社会学には、アメリカ流の社会学の内容は、まるでありません。であるからヴェーバーをいくら読んだがアメリカ的な社会学の教科書にのるような知識はほとんど増えません。またヴェーバーを読むのに必要な知識も、社会学の知識ではありません。むしろ歴史的な知識である。であるからヴェーバーが「社会学者」であるとされているのは、社会学が自分たちの権威づけのために偉い学者の名前を借りている、という面がかなりあるように思う。つまり社会学者は「虎の威を借りる狐」なのである。ヴェーバーの業績ははたしてアメ

リカ流の社会学のせまい枠に収まるものののだろうか。私はしばしば疑問に思うことがある。

しかしすくなくとも、この「異化する精神」を持っているという点だけだが、ヴェーバーは社会学者いがない何者だがないといえるのではないか。わたしはそう思うのである。

まえおきがたいへん長くなった。では『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の内容をみていくことにしよう。

3. 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（2）

基礎学力としての世界史

諸君のなかには、高校時代、世界史を選択しなかった人がいると思う。あるいは、授業はあったけど、受験科目には選ばなかった。だからほとんど勉強しなかったという人はいるだろう。

正直に言おう。世界史を勉強しなかった人は、大学生になるための基礎学力がかけている。ちょうど、それは数学を選択しないで大学の理科系に進んだ（あるいは微分を学ばずに経済学部に進んだ）ようなものである。世界史を知らないと、海外のニュースを聞いてもほとんど理解不能である（そんなことはないという方、それはわかったような気になっているだけである）。

また大学の学問の多くはもともとは西洋からの輸入学問であるから、その学問がうまれた背景となった西洋世界の歴史をしらないと、その学問の内容がいまいちよく理解できない。そんな高尚なことではなくて、たとえば海外を旅行したとしても、歴史を知らないと、何を見ても、「きれいだね」、「なんか壊れてる」、というふうに表面的にしかものをみることができない。

だから大学生になったら、世界史を勉強していなかった人は大急ぎで世界史の勉強をする必要がある。いちばん手っ取り早いのは、高校時代の教科書を読むことである。

なぜ世界史はむずかしいのか

と、まあ、えらそうなことを言っているが、私も、世界史を選択したものの、いつまでたっても不得意科目であった。どうにも頭に入っていない。どうしてなのかな、と今になって考えてみるに、まず人名がやたら多い、しかもその人名の人物がどの国の人がよくわからない。ヘンリーがアンリになったり、フィリップがフェデリコになったり。いったいどっちが正しいんだ。スペイン王がオーストリア王をかねたり、シチリアの王がドイツに領地をもったり、王族たちが現在の国の枠を超えて移動

したり結婚したりする。そもそも王様たちはどこの国の人間なのか。

だいたい国の形が変だ。今と違う地域がひとつの国だったというのならまだわかる。ところが、歴史地図なんかをみると、たとえば「神聖ローマ帝国」なんていう国は、まだら模様になっていてどこからどこまでが国なのかわからない。第一、まだら模様の国って何なんだ、ということになる。

このわけの分からなさを翻って考えてみると、実は我々がふつつひとつの「国」と考えているもののイメージがあって、それが通用しないから混乱もするし、理解できないし、その結果、覚えることもできないのだと気づく。

無自覚な前提としての独立国（国民国家）

では我々が、「国」と考えるものはどんなイメージのものなのか。

まず、国境によってはっきりと領土が区切られていている。地図で国が綺麗に輪郭をもって色分けできる国境の内部は日本なら日本、韓国なら韓国、という具合に一つの国家に帰属している。住民も一つの国に所属している。

国境で区切られた地域とその住民は、その国の政府によって支配されている。支配されるということは、税を徴収され、そのかわり、保護もされます。多くの国では徴兵もされます。こうした支配の実行はふつつ行政官、つまり官僚（役人）によってなされます。役人は中央政府からの指示によって動く。指示（命令）はふつつ文書でなされます。そのためその文書用には統一した言語が必要である。おなじく、支配された住民を支配・保護するために法体系が必要とされますが、それも同じ言語で書かれ処理されるのが普通である。

こうした中央政権とそれに支配される領域（領土）と人々（人口）からなる国を「独立国（主権国家）」（sovereign state）とよぶ。

中国の標準語のことを、「マンダリン」とよぶ。「マンダリン」というのはもともとは「官僚」のことである。だが官僚は共通の言葉を使っていないと帝国が支配できない。だから官僚になるためには、官僚の共通言語に習熟しているか試験して（科举）、それを各地に分配する。だから彼らの話す言葉も「マンダリン」と呼ぶわけである。それを「北京官話」と訳すのは、中央（北京）からの指令と中央への通報に使われる言葉だからである。

官僚には給与を払わなくてはなりません。そのためには全国に流通する貨幣制度が必要である。それができないと地元で税を徴収して官僚が取り、残りを中央に納めることになります。こうすると次第に地方はその官僚たちの領地ようになって、国は分裂している。

国境を超えて他国が侵略してきた時、それを異分子による侵入だととらえられます。逆に言うと、国境の内部の地域（国）はある種、同質の人々によって作られていると考えられている。では国の内部の人の同質性はなにによって支えられるのでしょうか。それは「我々は同じ『民族』だ」という思い込みによって支えられている。

では「民族」とは何なのでしょう。生物学的な同一性でしょうか。たとえば「日本人」というのは、じつはDNA的には多様な人種を含んでいると言われている。「中国人」とされる、項羽の頃の中国人のDNAはヨーロッパ人と同じで、現在の中国人とはまったく別だ、という話がある。同一の民族といっても、人種的・系統的に同じであるという保証はありません。

では「日本人」としての統一を作り上げているのは何なのか。もっとも重要なのは、「日本語」だろう。日本語を母語として話す（何世代も前から日本に住むアジア）人、それが日本人だ、ということになりそうである。

ともかく、同じ言語を話す同じ民族がまとまって占拠し、統一的な政府をもっている、それが「国」とであると、なんとなく我々はイメージしているようである。

主権国家が同じ民族によって構成されているとするのが「国民国家」（nation state）である。

だがこの、民族がそのまとまりによって国を作る（国民国家）というのは、19世紀以降、近代になって生まれてきたものである。それ以前の国が、この国民国家（民族国家）と同じだと考えるのがじつは無理があるのである。

封建制の下での国家

近代以前では、農民などの住民を支配し、保護する見返りだと称して税を取っていたのは領主であるが、この領主はより力の強い領主のことを聞いていた。もっとも強い領主が王と名乗っていたでしょう。しかし、各領主は別の王が強かった、そちらに寝返ることもあるでしょうし、王が弱くなった、あるいは死んだなら、自分が王になろうとすることもあったでしょう。すると、A王とB王の支配する、A王国とB王国の領土はきれいに色分けできず、入れ子状態だったでしょうし、王に歯向かう領主もいたでしょうからまだら模様にもなったでしょう。

東方からヨーロッパに移動してきたゲルマン民族の場合、ゲルマンの王が領地にいっしょに従軍してきた部下（従士）に、占領した土地（封土）を与えて配置した。彼らはその見返りに王が戦争をするときには部下として従軍する義務を負う。しかし、それが何代か経つと、独立して、王に刃向かったり、別の王に寝返りしたりすることもあった。

それで、部下のかわりに、跡継ぎができない僧侶を部下の領主として配置した。もちろん、僧侶（聖職者）の任命権（叙任権）は国王にありた。これを「帝国教会政策」といえる。僧侶はもともとゲルマンの王が配置したのであるけど、いちおうキリスト教会、とくにそのもっとも優位にたったローマ教会の支配下にあるということになります。

西ローマ帝国が崩壊したあと、そのローマ帝国の後継者という名目でゲルマンの王はヨーロッパを支配することになり、領地に多くの僧侶を配置した手前もあって、ローマ教皇に、「皇帝」と認めてもらうという形をとった。こうして生まれたのが、「神聖ローマ帝国」という、おもにドイツやイタリアを支配したふしぎな帝国である。

ローマ教皇はさらに、帝国の各地に皇帝が配置した僧院を自分の支配下に置こうとする。つまりその僧侶の任命を皇帝ではなく、教会が任命しようとする。ここにローマ教皇と神聖ローマ帝国の皇帝との対立抗争が生まれます。

抗争を有利にするために、各地の領主を味方につけるべく、領主の独立権を大幅にみとめたために、群雄割拠（小国乱立）の状態になってしまい、帝国のまとまりはますますなくなりました。また、王の血筋が案外絶えやすく（毒殺・暗殺が横行していたのかな？）、通婚によって支配関係に維持のために王や領主が通婚しているため、皇帝の継承権が錯綜する。結果、皇帝を選挙によって選ぶ強い権力をもった領主（諸侯）たちまで生まれたのである。

国語の成立

また、さきほど「同じ言語」といいたが、普段、住民が話すのはそれぞれの地域の方言であって、地域が違えばこの言語は違ってく。国民国家をつくるには、その様々に異なった言語を一つの共通言語にまとめる必要がある。つまり、「日本語（標準語）」、「イタリア語」、「スペイン語」、「フランス語」、「ドイツ語」という、民族国家ごとの言語が生まれる（作られる）必要がある。いや生まれるだけでなく、それが子どもたちに教育されなくてはいけない。ともかく国民国家の形成にあたってはこの統一言語の形成がかならず伴わなくてはならない。国民国家は、我々が独自の言語、を標榜する（じつはイタリア語とスペイン語の差は小さく、方言の違いのようなものである。であるからイタリア人とスペイン人はそのまま話してもだいたい意思疎通ができる。なのに、お互い別々の国であることを強調するために、別々の言語であると強調される）。

たとえば、セルビア語とクロアチア語はじつは同じ言語であるが、表記がセルビアがキリル文字、クロアチア

がラテン文字で表し、1991年の旧ユーゴスラビア解体により、別々の言語であるかのように標榜している。これはセルビアとクロアチアの両民族国家の構築のためになされたのである。

現在だが、多くの異なる言語を話す民族を束ねた国家が存在する。たとえば、中華人民共和国がそうである。ここでは行政などには、「北京官話」（マンダリン）が使われますが、地域によってはまるで違う言語を話している（たとえば、北京官話と広東語はまったく別の言語だそうである）。こうしたまるで違う言語を話す人達を同じ国家のうちに留めておくことができたのは、発音によって表記がかわる表音文字（アルファベット・アラビア文字など）でなく、漢字という表意文字（言語によってどう発音されようと見れば意味は通じる）の存在が大きい。

「国民国家」とは、多くの場合、1つの民族が、1つの言語を使い、1つの国家をつくっている、という国家をいう。この国民国家には、その「民族」の神話がある。またその成立存続には、共通言語の確立・教育が必要である。それにはメディアと教育システムの発達が不可欠なのである。

ともかく、世界史の理解にあたって、我々の、この、国といえば国民国家、という先入観が大きな障害となっていることは間違いない。

またその先入観を助長しているのが、世界史と日本史という区分である。日本では、「日本史」という区分があるために、ほとんど自動的に、日本という国が最初からまとまってあったような印象をもってしまい、その結果、世界史だが国といえばそういうまとまりがあるものだと思ってしまうがちである。また世界史も、東洋史と西洋史をくっつけたものである。中国史が、統一王朝の栄枯盛衰として語られがちなので、ますますそういうまとまりのあるのが国だというくらえかたにそまっている。その結果、世界史の理解がすまないということがあるように思う。

歴史とは物語

「世界史は暗記科目だから嫌いだ」という理由をあげる人も多いと思う。高校では教科書を覚えさせてすぐにテストして頭を叩くような教育をしているので、残念なことに、世界史嫌いの人がとても多くなってしまっている。

だが、だれでも子供の頃、昔話を讀んだり聞かされたりしたことがあるだろう。あるいは、ハリポッターのお話を楽しく讀んだ人もいるだろう。お話（物語）が嫌いな人というのはそんなにはいない。

ふつう我々は、歴史とお話（物語）とはまるで違うものだと思っている。英語では歴史（history）と物語

(story)とは別の単語である。だが歴史(history)という単語のなかには、お話(story)という単語が含まれている。実はヨーロッパの言葉では、歴史と物語は同じ言葉である。フランス語ではhistoire、イタリア語ではstoria、スペイン語ではhistoria、ドイツ語ではGeschichte、どれも「歴史」とも「物語」とも訳せる。つまりヨーロッパでは、「歴史」というのは、昔、本当にあったことのお話、なのである。歴史が好きな人はたいてい歴史が暗記科目だなんて思っていません。おもしろい話だから自然とおぼえてしまったという人がほとんどである。

だから、我々はもうテストする人もいないのだから、気楽に、物語だと思って読み流せばいいのである(だから読むなら、物語風を書いてあるものがよいだろう)。

文 献

- Brecht, Bertolt (1962)『今日の世界は演劇によって再現できるか』(千田是也訳)白水社
- Brecht, Bertolt (2006)『三文オペラ』(岩渕達治訳)岩波書店
- Weber, Max (1982)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上巻』(梶山力・大塚久雄訳)岩波書店